

## 『細雪』の中国語訳における人物像のリライトについて —翻訳者の序を踏まえて—

尹 永順

(神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程)

*This paper focuses on the relationship between translator's preface and translation strategy according to the analysis on the first Chinese translation of Sasameyuki.*

*In the preface written by Zhou, the heroine Yukiko was described as an unfortunate person who failed to control her fate, whilst Taeko was featured with the characteristics like an independent and progressive modern woman. It was also demonstrated through the example analysis that the translator tended to feature the characteristic of Yukiko with negative emotional words, whilst positive presentations for Taeko. In conclusion, the preface is the most important material for learning ideology of translator. The means of expression in the work was affected consciously or unconsciously by the translator's understanding and attitude to the heroine, thereby, the heroine's character was rewritten.*

### はじめに

従来の翻訳研究はテキスト自体に注目が集まり、テキストの前後を飾ってテキストと切り離すことができない序<sup>1)</sup>には十分な関心を寄せていないと言えよう。しかし、中国翻訳史上の貴重な翻訳論と翻訳思想の多くは序で述べられている。例えば、支謙が『法句経序』(252年前後)において述べた「因循本旨，不加文飾」は中国初の翻訳論とされ、嚴復が『天演論』の序『訳例言』(1898年)で述べた「訳事三難、信、達、雅」は現在に至るまで金科玉条とされている。それ以降、魯迅をはじめ、著名な翻訳家たちも序を通して翻訳実践から思い至った翻訳主張を語り、後の翻訳研究のために貴重な資料を残した。文化大革命のような厳しい時期には、序は出版を保証するために翻訳の必要性和合法化を主張する場となり、読者に政治的な読み方を示唆する道具として利用されることもあった。現在では、序は翻訳者の可視性を主張する場として、作者と作品紹介、作品の関連知識など翻訳テキストから直接読み取れない情報を読者に伝えたり、作品の読み方を方向づけたりする役割を果たしている。序は一般読者だけ

---

YIN Yongshun, "Rewriting of heroine's character in Chinese translation of *Sasameyuki*," *Interpreting and Translation Studies*, No.12, 2012. pages 175-188. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies.

ではなく、文学研究者たちにも影響を与えることがある。例えば、中国における村上春樹研究は殆どが翻訳者林少華の序における視点や理解を参照したものである(楊 2009, p.127)。翻訳テキストが間接的に読者に影響を与えるとすると、序は直接的に影響を与えることになる。序は翻訳者が翻訳プロセスで得た着想や感想をまとめたものであるため、翻訳プロセスの一環であると言えよう。したがって、本研究では、翻訳者の序を切り口とする。

作品、及び作中人物に対する翻訳者の理解と態度は意識的であれ、無意識であれ翻訳プロセスに影響を与えると考えられる。これは、ルフェーヴルのリライト理論を参照できる。ルフェーヴルは、「翻訳はもちろん起点テキストのリライト *Rewriting* である」(Lefevere, 1992: VII)と主張し、翻訳によって映し出された文学作品のイメージを左右する要素を二つ取り上げた。まずは、翻訳者のイデオロギー *Ideology* で、これは翻訳者自身が認めたものであったり、または支援によって押し付けられたものであったりする。支援とは、文学を読んだり、書いたり、リライトすることを促進したり妨げる権力(個人、制度)のことをさす。例えば、政党、出版社、メディア、検閲機関、学会誌、教育機関などがある(ibid.:15)。その次は翻訳が行われた特定の時期に目標文学において支配的な詩学 *Poetics* である(ibid.:41)。言い換えれば、翻訳を介した文学作品のイメージは翻訳者の理解と態度、及び翻訳者の理解と態度に直接もしくは間接的に影響を与えた社会環境と支配的な文学観が共同で働きかけて仕上げられたと言えよう。

序は、翻訳者のイデオロギーが反映される一次資料であり、序から作家と作品、及び作中人物に対する翻訳者の理解と態度、及び翻訳者の価値観が読み取れる。序を通して翻訳者のイデオロギーを知り、それを翻訳テキストと関連付けて考察することによって、翻訳者がどのように「文学作品のイメージ」をリライトしたのかを考察するのも一つの方法であると考えられる。

本研究で扱う作品は谷崎潤一郎の長編小説『細雪』(1942 - 1948)である。『細雪』は『源氏物語』の現代語訳の直後に書かれたため、現代版の『源氏物語』と高く評価され、毎日出版文化賞(1947年)や朝日文化賞(1949年)を受賞した。中国における『細雪』の初訳<sup>2</sup>は1985年に周逸之によって翻訳されたものである。この初訳には翻訳者が執筆した1万字程度の序が収録され、文学研究者の間で「優れた序」と高く評価され(王 2000)、それ以降の『細雪』研究に影響を与えた。本研究では主に主人公雪子と妙子の人物像に焦点を当てて、翻訳者の序が翻訳テキストにおいてどのように反映されたのか、つまり、主人公に対する翻訳者の理解と態度がどのように翻訳を介して人物像をリライトしたのかを考察する。

本研究の構成は以下の通りである。まず、第1節では、谷崎潤一郎の文章、及び日本の作品解説を取り上げ、日本における雪子と妙子の人物像を考察する。第2節では、周逸之の序と参照元である伊藤整の作品解説を雪子と妙子の人物像に焦点を当てながら比較し、具体例を取り上げて周逸之の序と翻訳テキストとの関係を実証する。第3節では、参考までに、ほかの中国語訳の序における雪子と妙子の人物像をまとめる。

## 1. 日本における『細雪』論

この節では、主に谷崎潤一郎の文章、及び中国で『細雪』の初訳が出された1985年までに日本で出版された『細雪』に収録された作品解説を踏まえて、日本における雪子と妙子の人

物像を考察する。

### 1.1 谷崎潤一郎が語る『細雪』

まず、谷崎潤一郎が『細雪』についてどのように述べたのかを考察する。

『細雪』は谷崎潤一郎の妻松子夫人の四人姉妹をモデルとして書かれ、三女雪子の5回にわたる見合いをめぐる物語が展開される。もともと谷崎潤一郎は「上流階級の、腐敗した、頹廢した方面を描くつもりであった」が、時局の関係で「そういう題材を選ぶことが危険になってきたので、已むを得ず彼ら(軍部—著者注)に睨まれないような方面だけを書くことになってしまった。『細雪』と云う題はそうなってから、雪子を女主人公にするつもりで思いついたのである」<sup>3</sup>(谷崎 1969:364-365)。『細雪』上巻を私家版で出した際、雪子のモデルである重子宛の手紙において、「第一に貴女様へ御送り申上ます。中略。此の著書は作者よりもむしろ貴女様の方に第一の権利があります。中略。これは小生の最大長編にて且一番の傑作になるつもりですが御蔭様にてこういうものができました事を深く感謝しております」(谷崎 1967)と書いた。谷崎潤一郎にとって、重子は「今にも誰かに汚されそうでいて微塵も汚れに触れることなく生きている」女性であり、「私はいつも彼女と談話を交す時は人知れず心を使い、なるだけ機嫌を損じないように、気むづかしい彼女の気に入ると努める」(谷崎 1966-1970)。このように、『細雪』において重子こと雪子は作品に欠かせない重要な存在である。谷崎潤一郎は日本の伝統的な女性像を雪子に託して、自らの「永遠の女性」として打ち込んで描いたと考えられる。

そして、谷崎潤一郎は『源氏物語』との関係について以下のように述べている。「源氏は好きで若いときから読んだものではあるし、特に長年かゝって現代語訳をやったあとでもあるから、この小説を書きながらも私の頭の中にあっただけはたしかである。だから作者として特に源氏を模したと云うことはなくても、いろ／＼の点で影響を受けたと云えないことはないであろう」(谷崎 1959:137)。

### 1.2 作品解説から見る『細雪』—雪子と妙子の人物像を中心に

1985年までの作品解説における雪子と妙子の人物像を以下のようにまとめる。

作品のほんとうの主人公である雪子は、消極的で静かでありながら、芯の強さも秘めている純日本的令嬢であり、作者と読者が永遠に無比の美しさを保っていることを望んでいる、言わば、「永遠の女性」である(サイデンスティック(1966)、磯田(1957)、十返(1954)、伊藤(1963/1980)、小田切(1974)ほか)。このような女性の美は古い家庭制度によって確保されている(十返(1954)、伊藤(1963/1980)、野口(1984)ほか)。

雪子の結婚は、作品の最後に雪子が執拗な下痢に悩まされることが象徴するように、「かならずしも雪子の気に染まっていなかった」(野口 1984)。そして、下痢は肉体上の偶然事であり、理想を裏切る現実の象徴であるため、「理想の女性」として描いてきた雪子を現実の世界へ連れ込み、聖なるものと俗なるものを結びつけたと解釈されることもある(磯田 1957)。

現代的な妙子は主に雪子の日本的特色を引き立てるために使われた。妙子は「男とのトラ

ブル」や「問題」を起こし、「男の苦勞」をして、「不幸な生活に落ちてゆく」のである(小田切(1974)、十返(1961)、伊藤(1963/1980)、野口(1984)など)。妙子は雪子の美を引き立てる古い家庭制度に封殺された被害者としてあくまでも従の立場に立たされた(伊藤(1963/1980)、野口(1984)ほか)。その一方で、もしリアリズム小説、批評精神の視点から考えれば、妙子が一番手ごたえのある、生气に富む人物であると指摘された(サイデンスティック(1966)、野口(1984))。

このように、日本における作品解説は谷崎潤一郎にならって、雪子が「永遠の女性」であることに光を当てて、妙子には共感を持っていないと考えられる。そのうち、磯田(1957)の解説『『細雪』について』は1989年に出版された中国語訳の序として翻訳、引用されている。そして、最も代表的な解説は、谷崎潤一郎の最もよき理解者というべき伊藤整(小田切 1969, p.268)によるもので、小田切(1974a)などの作品解説に影響を与えただけではなく、本研究で取り上げる周逸之の序にも深い影響を与えた。

周逸之訳『細雪』は1980年に講談社から出版されたバージョンをもとにしている。周逸之は序を執筆する際に、西郷信綱の『日本文学史』、谷崎潤一郎の『『細雪』回顧』、及び原作に収録された伊藤整の作品解説を参照した。特に、作品の特徴、『源氏物語』の影響、雪子の人物像など重要な箇所は伊藤整の作品解説をそのまま翻訳、引用している。便宜上、伊藤(1963/1980)による解説は次の節で改めて取り上げる。

## 2. 周逸之の序と中国語訳

この節では『細雪』の翻訳者周逸之が序において述べた『細雪』、とりわけ雪子と妙子の人物像が実際の翻訳においてどのように反映されたのかを考察する。周逸之の序<sup>4</sup>は、「中日友好関係」や「中日文化交流」を切り口にして、谷崎潤一郎と作品、中国との関係を概観し、出版経緯から『細雪』の紹介に入って、執筆の原因、人物像の分析、作品の文学的特徴、作品の批判という流れで書かれている。周逸之の序の特徴を明らかにするために、伊藤整の作品解説と対照的に取り上げる。

### 2.1 周逸之の序と伊藤整の解説との共通点

周逸之の序は作品の特徴、『源氏物語』の影響と雪子の人物像の分析において伊藤整の作品解説を引用した箇所が見られた。まず、作品の特徴として取り上げたのは、読者が期待するような物語としてのクライマックスや劇的な事件が起こらないことである。『源氏物語』の影響は、作品が並列的で、三角関係や四角関係になることがまれであるが、これは社会的な構造の反映であるという構造上の特徴が引用された。雪子の人物像については、西洋の小説の中の女性のように際立つ行動も、意見もなく、積極的に自分を生かそうとする意志をもっていないように見えるが、その受け身の寡黙な生き方においてこの女性は自己の判断と生活を崩さず、周囲の事情に押し流されているようでありながら、何人も彼女を左右することができないといった評価はそのまま翻訳、引用されている。

## 2.2 両者の相違点－雪子と妙子の人物像を中心に

両者の相違点は主に作者の反戦的態度、雪子の人物像とその歴史的原因、及び妙子の人物像の分析であるが、中でも人物像に焦点を当てながら考察する。

### 2.2.1 作者の反戦的態度

伊藤整は『細雪』の出版経緯を紹介することで時局の影響を指摘した。周逸之は『細雪』の出版経緯を紹介しただけではなく、『細雪』が書かれた背景を戦争と関連付けて詳しく述べ、作者の反戦的態度を入念に強調した。つまり、日本の反動政府は侵略戦争の政策を広めるために、国内で極めて乱暴なファシズムの統治を行ったが、谷崎潤一郎はそうしたファシズムへの支持を避けるために、没落した家庭の四姉妹の結婚や生活を描いた『細雪』を書いた。下層社会や労働者階級に比べると、上流社会は裕福であるが、それでも作品には服装や医薬品など日常生活において戦争の影響が読み取れ、作者は作品の登場人物の口を借りて、戦争への不満を漏らしたとする。谷崎潤一郎はブルジョア作家として、下層社会の苦しい生活や日本のプロレタリアがファシズムに抵抗する闘争を描くことはできなかったが、上流社会を引き合いにして日本の侵略戦争が幅広い国民にもたらした巨大な被害と国民の反戦的態度を間接的に反映させた。さらに、貞之助の台詞「さあ、私達には政治のことはよく分かりませんが、何にしても日本と支那とが仲が悪いのは困ったことですよ」(p.56)を引用して、当時の残酷なファシズムの統治下で、作者が日本国民の中日友好を願う願望を勇敢に表したことは、高く評価されるべきであると賞賛した。その一方、序の最後では、小説には様々な原因で「時代遅れの、不適切な内容」があるため、批判的に読むべきであると読者に注意を呼び掛けている。幸子とドイツ人との手紙には「ドイツとイタリアのファシズムを扇動、美化する」表現が見られるためである。例えば、ドイツ人の手紙では、ゲルマン民族と大和民族は「向上に努める若々しい民族」であり、「日向に一つの席を占める」(p.369)と自慢したが、これはヒトラーのようなドイツと日本のファシスト頭目が反動的な人種差別主義の思想を鼓吹し、他国を侵略して各国の人民を酷使した理論的根拠の一つであると指摘した。さらに、戦争の被害を受けた上流社会に、軍国主義の薫陶を受けて愚かに反動的なファシスト頭目を崇拝する人がいるように、ファシズム思想は害毒が広く、しかも深いと述べた。上述の内容はそれ以降の研究者たちに影響を与えた。例えば、反戦的態度は文(1990)、陳(1993)などに参照され、「ファシズムを扇動、美化した」という内容は王(2000)に引用され、評価された。

### 2.2.2 雪子の人物像

伊藤整は2.1節で述べた雪子の人物像と物語にクライマックスが存在しないという作品の特徴との一貫性を取り上げ、「日本の典型的な女性を描けば、写實的にこのような作品が結実される」という必然性を指摘し、雪子なしではこの作品が成り立たないことを強調した。その一方で、周逸之は雪子が作者にとっては「理想の女性」であることを認めただけで、こうした人物像が形成された原因を歴史的に探った。つまり、長期にわたる封建社会を経て、日本では女性の社会的地位が低く、従順だけが女性の最大の美德とされてきた。その後の明治維新は不

徹底なブルジョア民主主義革命であったため、改革後も封建勢力は依然として存在し、『細雪』の時代も女性の社会的地位は根本的に好転していなかった。そのため、谷崎潤一郎が描いた雪子はいささか従順なだけではないところもあるが、階級や家柄の観念に束縛され、自分の運命を将来の夫に託し、夫に従属せざるを得なかった。雪子の結婚は愛情に基づく結婚ではなく、主に家柄、社会的地位、特に財産を条件としたが、これは雪子に自立する技能と経済的地位がないためである。作品は結婚が決まった雪子が上京する場面で終わるが、「下痢はどうもその日も止まらず、汽車に乗ってからもまだ続いた」(p.375)。この描写は雪子の将来の結婚生活に哀愁、淋しさ、不吉の雰囲気をもたらし、雪子の不幸な運命を予示すると周逸之は指摘した。

以下は具体例を通して、雪子に対する翻訳者の理解と態度が実際の翻訳においてどのように反映されたのかを実証する。周逸之独自の理解と翻訳方略との関係を明らかにするために、上海訳文出版社の儲元憲訳(2001)を取り上げて比較対照する。雪子にかかわる会話や描写から代表例を以下のようにピックアップした。1985年版をTT1とし、2001年版をTT2と示し、括弧の中は筆者による直訳である。

#### 例1

ST: 雪子は義兄たちや姉たちの意見が一致した時なら、どこへでも云われるままに縁づくと云って、それらの条件にも不服を唱えはしなかったけれども、(p.13)

TT1: 姐夫姐姐们意見一致，雪子只得唯命是从，对这些条件不表異議，(義兄と姉たちの意見が一致した時なら、雪子は言いなりになるしかなく、これらの条件に異を唱えなかった)。(p18)

TT2: 雪子本人也說，只要姐夫和姐姐们都同意，叫我嫁到哪家就去哪家，上面那些条件自己不反对，(雪子自身も言った。義兄と姉たちが賛成すれば、どの家でも言われるままに縁づく、上述の条件について自分は反対しないと)。(p.11)

原作は雪子の会話を間接引用して、雪子の考えを述べているのに対して、TT1 は作者の視点を変えて、客観的に、それも「只得(しかない)」という受身のニュアンスを付けて述べている。TT2 は原作と同じく雪子の会話を間接引用し、言われるままになるといった表現も原作に近い。

#### 例2

ST: お嬢さんもお綺麗でいらっしゃいますけれど、何しろあゝいう細面の淋しいお顔だちですから、奥さんとお並びになると一二割方御損ですわ。(p.25)

TT1: 您家小姐也很漂亮，但是不知怎的，面孔長長，又老是愁眉苦臉的，和太太站在一起，就頭得差一大截了(お嬢さんもおきれいだが、何しろ顔が長くて、またいつも眉をひそめて、苦しそうな顔をしているから、奥さんと並ぶとかなり損である)。(p.38)

TT 2: 雪子小姐固然很美，不過她是鵝蛋臉，而且常帶愁容，和您一比，就比下去了(雪子お嬢さんはおきれいだが、彼女は瓜実顔だし、またいつも憂いをおびているから、奥さんと比べると、見劣りがする)。(p.25)

雪子の見合いを斡旋した美容院の女主人が雪子の姉幸子に語る内容である。雪子の顔立ちについて、原作では「細面」と「淋しい」という表現を使ったが、TT1 では「顔が長く」、「いつも眉をひそめて、苦しそうな顔をしている」とした。原作では、地味な美人のイメージを浮かべる生まれつきの顔立ちとして現れたが、TT1 の「面孔長長(顔が長い)」は顔が不自然に長いというニュアンスをほのめかすこともあるため、美人というイメージを弱めている。さらに、「いつも眉をひそめて、苦しそうな顔をしている」表情に変わったこの描写を加えると、姉と比べて原作では「一二割方」しか損でないものが、TT1 では「差一大截(かなり損)」であるとされるのも納得がいくだろうと考えられる。このほかにも「淋しい顔立ち」は「愁容慘澹, 寂寞冷清(憂いをおびた表情、寂しくてひっそりする)」に、「細面の、淋しい目鼻立ち」は「脸型稍長, 一副凄苦相(顔の形がやや長く、苦しそうな顔)」と訳されているが、いずれも暗いイメージを与えよう。ちなみに、以上の中国語訳を踏まえて、日本の「典型的な」伝統的女性像を検討した研究が見られたが(王 2010)、著者は恐らく翻訳を介して読者に与えたイメージが変わり、原作と中国語訳との間にずれが生じたことに気付いていないだろう。その一方で、TT2 は「細面」を「瓜実顔」と訳したため、「面孔長長(顔が長い)」より美人のイメージが浮かびやすいと考えられる。

### 例 3

ST: 雪姉ちゃんはいよ〜慌てよ、真っ赧な顔をして、「あのう、—あのう、—」とヘドモドするばかりなので、(p.103)

TT1: 雪姐慌慌張張, 臉孔漲得通紅地說: ‘那一那一’一副不知所措的狼狽象(雪姉ちゃんは慌てて真っ赤な顔をして「あのう—あのう—」とへどもどし、狼狽した姿であった。)(p.174-175)

TT2: 這時雪姐更加慌了手脚, 面孔漲得通紅, 張皇失措地只管 “这个, 这个……” 的說不出話來(雪子はいよいよあわてふためき、顔が真っ赤になって、へどもどして「これは、これは—」とばかりで、ほかに言葉が出なかった)。(p.110)

出先で見合い相手にばったりと会った雪子の行動について妹の妙子が幸子に語る場面であるが、TT1 では「狼狽象(狼狽した姿)」というマイナス感情の表現を付けた。TT2 は「ほかに言葉が出なかった」を追加しているが、これはマイナスの表現ではない。

### 例 4

ST: 妙子が端の迷惑や人の思わくも構わないで、自分の好きなように振舞うのに反して、全然能動的に動く力を缺いているような雪子の、あれ以来東京の空で侘びしく暮らしているであろう様子が、しきりに幸子の念頭に浮かんだ。(p.196)

TT1: 妙子即使被人認為妨害了別人也毫不在乎, 為所欲為. 与之相反, 雪子却全然缺乏主宰自己命運的能力. 這時, 幸子常常思念那以來在東京寂寞地打發着時日的雪子. (妙子は端の迷惑も構わないで、自分の好きなように振舞う。それに反して、雪子は自分の運命を左右する能力が全然ない。最近、幸子はあれ以来東京で侘びしく暮らしている雪子がしきりに思い出された)。(p.337)

TT2: 幸子經常想到在東京過着寂寞生活的雪子。她的性格和妙子不一樣, 妙子不理會別人的為難處境和意見, 自己愛怎樣干就怎樣干。雪子和她相反, 完全缺少主動性(幸子はしきりに東京で侘びしく暮らしている雪子が思い出された。彼女の性格は妙子と違う。妙子は端の境遇と思わくも構わないで、自分の好きなように振舞う。雪子は妙子に反して、全然主動性に欠けている)。(p.211)。

雪子と妙子が対照的に現れた箇所であるが、原作の「能動的に動く力」が TT1 では「自分の運命を左右する能力」と書き換えられている。原作では前向きに何かをしようとする行動力が欠けていると軽く読み取ることも可能であるが、TT1 は「運命」という重い表現を使って、不幸なイメージを浮き彫りにした。TT2 は「主動性に欠けた」のは「性格」の問題であると指摘した。

#### 例 5

ST: 何もカタリナのようなのが羨ましいと云うのではなく、あんなのよりは雪子ちゃんの方がどんなによいかと思うけれども、(p.273)

TT1: 这并非說羨慕卡塔莉娜, 但是与她相比, 雪子的命运又是怎樣地好嗎(カタリナが羨ましいと言うことではないが、彼女と比べて、雪子の運命はどれだけいいのであろうか)? (p.471)

TT2: 并不是卡德麗娜那番作為值得羨慕, 比較起来, 雪子妹妹比她強得多(カタリナのようなことが羨ましいと言うのではないが、比べてみると、雪子妹のほうが彼女よりずっといい)。(p.297)

絶対にお金持ちと結婚すると決意したロシア人女性カタリナが家族を捨てて一人で海外に渡り、実際にお金持ちと結婚できたことを知った幸子の心理描写である。原作と TT2 ではカタリナより雪子のほうがいと述べているが、TT1 では、例 4 と同じく、雪子の「運命」として扱い、それも好ましくないという意味で使われている。

#### 2.2.3 妙子の人物像

次は妙子の人物像である。伊藤整の作品解説では、妙子は雪子を引き立てる存在として、「三十一歳で」、雪子の周りでは「妹妙子の不幸な恋愛事件も起こる」としか言及がない。周逸之は妙子を雪子と対照的に取り上げてはいるものの、女性の社会進出という視点でかなりの紙面を割いてポジティブに評価している。周逸之によると、妙子は多芸多才な現代女性であり、家柄重視の旧観念から抜け出して、丈夫な身体、職業と技能を持つこと、自分を愛することを結婚相手の条件として出した。20歳で駆け落ちし、その後命を救われた下層社会の男と結婚しようとする。やがてバーテンダーが好きになって計画的に妊娠までして、家族の承認を受けようとしたように、妙子は愛情と幸せを追求するために、計略的で極めて大胆であると言えよう。こうして、活発で、ひたむきで、生き生きとした反逆する女性像が現れた。妙子が能動的に自分の運命を操ることができたのは、自立できるような人形作りと裁縫の技能を持っているからである。これを以って、妙子は自分の幸せを掴み、幸せを誓ってくれる下層社会の男性と結ばれた。妙子は雪子のような盛大な結婚披露宴や祝いをもらえなかったが、将来の結婚生活はきっと充実し、穏やかで、幸せであろうと周逸之は予測した。というのは、中流社会という桃源郷

から離れて、夫と同様の地位に立って平等に家庭を営むからである。

さらに、妙子の人物像は『細雪』の時代から 40 年余り過ぎた今日も現実的意義があると指摘された。日本の女性は、社会進出により視野を広めて夫への依存度を弱めないと、家庭と社会で平等な地位が勝ち取れないことを認識し始めたからである。そして、女性の社会進出が『細雪』の愛読された理由であると示唆した。つまり、『細雪』の魅力を妙子の人物像に託したと言えよう。こうした妙子の人物像は以下のように翻訳テキストに反映されている。

#### 例6

ST:持ち前の若々しさや澁刺さが消えていて、実際の年齢にふさわしい年増美といったようなものが現れているのにも、一種の好感が持てるのであった。(p.132)

TT1:容貌為之一変, 那种天賦的年輕和澁辣劲儿消失了, 呈現出一種与實際年齡相称的端庄, 持重的美, 这也使人抱有**好感**(容貌が変わって、持ち前の若々しさと気の強さが消えていて、実際の年齢にふさわしい行儀良さ, 落ち着いた美が現れているのにも、好感が持てるのであった)。(p.225)

TT2:一張面孔和往常全然變了樣, 那种天生的活潑劲儿消失了, 呈現出符合于她實際年齡的那种“中年美”, 幸子对此也產生一種**好感**(いつもの顔がすっかり変わり、持ち前の澁刺さが消えていて、実際の年齢にふさわしい“中年美”が現れているのにも、幸子は一種の**好感**が持てた)。(p.141)

原作の「澁刺さ」は元気のよいことを指しているが、TT1 の「澁辣劲儿」は気が強く、大胆であることを指す。「澁刺(澁辣)」は中国語にもある表現であるが、大胆という意味で使われる。翻訳者は恐らく妙子のイメージに対する先入観から、つい中国語として解釈してしまったのではないかと考えられる。TT2 は「澁刺さ」の意味を正確に読み取っているが、「年増美」が老けた印象を与える「中年美」と訳されているため、TT1 のような**好感**が持てないと考えられる。

#### 例7

ST:末っ児に生れて一番不仕合せに育ったせいか、自分たちの誰よりも世故に長けていて、自分や雪子などの方が却って妹扱いされるくらいなのであるが、(p.132)

TT1:妙子作為最小的孩子, 生下来适逢家運衰退, 因為在這種環境下成長, 她比另外几个姊妹都要老于世故, 幸子自己和雪子, 反而被她当妹妹看待了(妙子は末っ子として、生まれて家運衰退に遇われた。このような環境下で育つたため、彼女は姉たちよりも世故に長けていて、幸子自身と雪子は却って妹扱いされた)。(p.226)

TT2:也許是因為姐妹几个她出世最晚, 身世最不幸, 人情世故反而比誰都懂得多, 幸子本人和雪子几乎都被她当作小妹妹看待(姉妹のうち、彼女は生まれが一番遅く、身の上が一番不幸であったためか、だれよりも人情世故に長けていて、幸子自身と雪子は彼女に妹扱いされるくらいである)。(p.141)

TT1 は原作の「不仕合せ」を避けて、「不仕合せ」の原因に当たる家運衰退に視点を變えて述べていると考えられる。これは周逸之が序で述べた妙子は家運が傾いた後に育つたため、古い結婚観に束縛されることなく、前向きに自分の幸せを追求し、上流社会にこだわらずに積

極的に社会進出したことをポジティブに評価した内容と一致する。つまり、周逸之は妙子が「不仕合せ」ではないと主張するのである。そして、原作は「せい」という接続表現を使って、「お姉さんたちより世故に長けている」ことを良くないことに決めつけたが、TT1 の「因為」は良いこととして読み取ることもできる。TT2 は原文にならって「身の上が不幸」であると翻訳されている。

#### 例 8

ST: お金の問題を解決しないことには気が済まない、(p.211)

TT1: 对于没有解决金錢一事我很不滿(お金の問題を解決しないことに、私はとても不満に思う)。(p.363)

TT2: 以解决那笔錢的問題, 否則她安不下心来(あのお金のことを解決しないと、彼女は落ち着かない)。(p.228-229)

妙子が裁縫店を開くために、結婚用として預けたお金を本家と談判してまでも受け取ろうとする場面であるが、表現として原作と TT2 は自分の気持ちを素直に表しているのに対して、TT1 では明らかに自分の感情を相手に押し付ける妙子の気の強さを表現している。

#### 例 9

ST: こいさんはあゝ見えても、案外お人好しの一面があるから、恐らく板倉の云うなり次第に利用されているのであろう、(p.212)

TT1: 別看小妹那様子, 她也有特別招人喜歡的一面, 恐怕已經是对板倉言听計从, 任他摆布了(こいさんはあゝ見えても、とても愛嬌のある一面もあるから、恐らく板倉の言いなりになり、操作されているだろう)。(p.365)

TT2: 別看細姑娘这人精明干練, 另一面却意外地忠厚老实, 說不定什么都听从板倉的, 被他利用(こいさんは頭がよくて仕事もできるが、一方では案外正直でおとなしいところがあるから、もしかしたら何でも板倉の言いなりになり、利用されている)。(p.230)

例 8 に続く場面であるが、幸子と雪子は妙子が本家からお金を受け取ろうとするのは、恐らく恋人の板倉の教唆があるからだと推測する。TT2 は原作とおりに「お人好し」に翻訳され、性格上の欠点として現れたが、TT1 の妙子は愛嬌があってみんなに好かれるといい方面に書き換えられた。

#### 例 10

ST: (幸子も) 今度ばかりはさしものこいさんも少からず参っているに違いないのだけれど、そういう弱みを見せないのがえらい、さすがにこいさんはいろいろなことをしでかすだけあって、あたしなどには真似のできないところがあると、貞之助に云っていたのであるが、(p.259)

TT1: .....她对貞之助說, 这一次, 那位小妹也一定很痛苦, 但是她那种剛強的神態真了不起, 到底是一个敢作敢当的奇女子, 她们是学不来的(彼女は貞之助に言った。今度ばかりはこいさんもきつと苦しんでいるだろうが、しかし彼女の氣丈なそぶりはすばらしい、さすがにや

ったことにはすべて責任を負う類まれな女であって、彼女たちは真似できないと)。(p446)

TT2:她对贞之助说:“那样一个细姑娘, 总以为这次吃足苦头了, 可是她却并没有示弱, 实在了不得; 毕竟细姑娘是个什么都干得出的人, 不是我们这种人能学得像的”(彼女は貞之助に言った。「こいさんのような人でも、今度ばかりはつらい目に遭ったかと思っただが、彼女は弱みを見せなかった。実にすばらしい。さすがにこいさんは何でもしでかす人であって、われわれのような人が真似できるものではない」)。(p.280-281)

妙子が恋人の板倉に死なれ、絶望のあまり何事にも興味をもたず、落ち込んでいたが、一二週間も経たないうちに立ち直り、いつもの活気に戻ったのを見た幸子の台詞である。原作の「いろいろなことをしでかす」は悪い意味で使われることが多く、ここでも皮肉めいた表現であると考えられるが、TT1 では「敢作敢当(やったことにはすべて責任を負う)」の堂々としたイメージに仕上げただけではなく、さらに良い評価に用いる「奇(類まれ)」をつけた。TT2 の「什么都干得出(何でもしでかす)」は、自分の目的のためには手段を選ばず何でもやるという悪い意味で使われているため、原作に近いと言えよう。

上述のように、周逸之の序は伊藤整の解説を参照したうえで、自分独自の理解と解釈を付け加えている。伊藤整は谷崎潤一郎にならって、雪子を「永遠の女性」として注目し、雪子以外の人物にはあまり関心を寄せなかった。その一方、周逸之は雪子を旧観念の犠牲者となった不幸な女性として扱ってネガティブに評価し、妙子は愛情と幸せを前向きに追求する女性、技能を持って自立する女性、家柄にこだわらず愛情を優先する現代的な女性として高く評価し、「不幸な」イメージを取り消しただけではなく、妙子を雪子より重要な位置に据えたと考えられる。こうした翻訳者の理解と態度が翻訳テキストに表出され、雪子にはネガティブな表現を用いて、妙子にはポジティブなイメージを作り出そうとする動きが見られたと言えよう。特に TT2 と比較することによって、表現上の差異がさらに浮き彫りになったと考えられる。

### 3. ほかの中国語訳の序における人物像

参考までに、初訳以外の翻訳状況を紹介します。それぞれの序において雪子と妙子がどのように述べられたのかを考察する。1989年に上海訳文出版社から儲元熹訳の『細雪』が「二十世紀外国文学叢書」として出版され、日本の文芸評論家磯田光一の「『細雪』について(中国語訳:談談《細雪》)」が序として翻訳された。その後、2001年、2007年、2011年に上海訳文出版社からそれぞれ「世界普及版」、「訳文名著文庫」、「訳文名著精選」として『細雪』が再び出版されたが、翻訳者はいずれも儲元熹で、訳文も殆ど変わっていない。ただし、序の執筆者が2001年版は同出版社の編集長沈維藩、2007年と2011年版は文学翻訳家の周祥侖へと変わっていて、いずれも「第一版」とされる。そのほかに、1991年には孫日明・陳競・梁守堅共訳の『細雪』(中国語訳:『乱世四姐妹』)が広西民族出版社から出版された。序の執筆者は「翻訳者」である。

1989年版では、「純粹で慎ましい雪子と、かなり奔放な氣質を持った妙子とが、作中人物として巧みに対比され」、雪子を「俗世間の汚れに染まらぬ“永遠の女性”として」描いた。1991年版では、主人公雪子は結婚について自分の考えをしっかりと持っていて、兄たちの言いなり

にはならず、いかげんに自分の結婚を決めることもなかった。妙子は結婚において男尊女卑という伝統的、封建的な観念に束縛されていない。2001年版では、雪子は自分の考えと洞察力に欠けていないが、結婚においては全然能動的ではなく、兄たちに操られながら、見合いを繰り返すが、家柄や財産などの問題で失敗し、30歳を過ぎて本心に逆らって華族の後裔と結婚する。従順一方の雪子とは反対に、妙子は様々な性格上の欠点はあるものの、奔放で、下層階級の男が好きになる。二人の結末は異なるが、いずれも家柄重視という伝統的な観念下で犠牲者となった悲劇の人物である。

2007年版と2011年版では、雪子には自分なりの考えと洞察力はあるが、結婚において伝統的な観念に束縛され、見合いも家庭、財産、性格などの原因で失敗に終わる。30歳を過ぎてようやく理想的な男性と結ばれる。妙子の結婚も家族を悩ませるが、妙子は女性の自立を主張し、家柄重視の観念を自ら打破して、自由に結婚相手を見つけようとし、最後はバーテンダーと平凡な生活を送る。小説は雪子を純潔で美しい日本女性のモデルとして称え、妙子は本分を守らず家門の名誉を傷つける女性として批判したが、二人とも家柄重視の観念の犠牲者である。

以上のように、1989年版は雪子を「永遠の女性」とし、1991年版は主に雪子と妙子の、特に雪子の長所を強調した。2001年以降はいずれも二人を家柄重視の観念の犠牲者と位置付けた。妙子に十分な関心を寄せてポジティブに評価したのは恐らく周逸之の序だけであると考えられる。

## おわりに

本研究では、谷崎潤一郎の『細雪』を取り上げ、翻訳者周逸之の序を手がかりとして、翻訳者が主人公雪子と妙子の人物像をどのようにリライトしたのかを考察してきた。リライト理論を考案したルフェーヴルは文学作品のイメージを左右する2要素として翻訳者のイデオロギーと支配的な詩学を取り上げた。序は作品や主人公に対する翻訳者の理解や態度を表す場であるため、翻訳者のイデオロギーを読み取る重要な素材であると考えられる。周逸之は女性の社会的地位や社会進出という視点から、谷崎潤一郎自らが「永遠の女性」として描いた雪子を不幸な人物として位置付け、妙子を現代的な女性として高く評価した。このような翻訳者の理解と態度は翻訳にも反映された。具体例を分析したところ、雪子についてはネガティブな表現を使う傾向が見られ、妙子についてはポジティブな表現を工夫したことが判明した。周逸之における雪子と妙子の人物像はそれ以降の研究にも影響を与えた。例えば、楊(2006)などは主に周逸之の序を踏まえて雪子と妙子の人物像を考察した。このように、翻訳テキストを独立して扱うのではなく、序を含むパラテキストとの関係にも注目すべきであると考えられる。

.....  
**【著者紹介】**

尹永順(いんえいじゅん) 神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程在籍中。中国電子科技大学日本語学部専任講師。中国における谷崎文学の翻訳と受容に関する研究に従事。主な論文は「中国における谷崎文学の翻訳と受容の変遷—作品の選択と評価を踏まえて」(『通訳翻訳研究』第10号)など。

.....

**【註】**

- 1 本研究では便宜上、原著者以外による序、まえがき、前言、あとがきなどを「序」とする。
- 2 初訳以前にも『細雪』を翻訳する動きは見られたが、時代的、個人的原因から途中で挫折し、出版までには至らなかった。1957年に谷崎文学の翻訳を多く行ってきた章克標が自ら『細雪』を選定して上海新文芸出版社に勧め、『四姐妹』という標題で翻訳に取り組んだが、体調不良、そして間もなく整風運動で「反革命」罪に問われ、第二章で筆を擱いた(章2003, p.264)。1980年代に入って、日本文学翻訳家の文潔若も上海訳文出版社からの依頼を受け、『細雪』の翻訳を始めたが、1万字程度を翻訳したところであきらめた。その原因は、京都弁に潜んだ微妙なニュアンスを中国語で表現するのが難しいこともあったが、それよりも女主人公の生活観を思想的に受け入れられなかったためである。女主人公たちが帯からおかしな音が出たことを笑う場面を緻密に描いたところで筆を擱いたのである(文1997)。
- 3 以下旧仮名遣いをすべて現代仮名遣いに変える。
- 4 序の書き方や作品に対する翻訳者の理解にその時代の刻印が押されたのも見逃せない。周逸之が1983年に執筆した『細雪』の序では、政治的立場や戦争問題が大きく取り上げられたり、現実的意義があるかどうか、読者の手本となる「典型的な」人物像があるかどうかを確認したり、賞賛しては必ず批判を加えるなど、政治的な基準、及び当時主流文学とされる現実主義文学の基準に合わせる傾向が見られた。その時代の主流イデオロギーと支配的な詩学に左右されていると言えよう。

**【参考文献】**

- 陳徳文(1993)「谷崎筆下的女性世界——『細雪』人物論」『当代外国文学』01期
- 儲元憲訳(1989)『細雪』上海訳文出版社
- 儲元憲訳(2001)『細雪』上海訳文出版社
- 儲元憲訳(2007)『細雪』上海訳文出版社
- 儲元憲訳(2011)『細雪』上海訳文出版社
- 磯田光一(1957)「『細雪』について」『細雪』(下)新潮文庫
- 伊藤整(1959)解説『谷崎潤一郎集』(二)(日本文学全集16)新潮社
- 伊藤整(1963/1980)作品解説『谷崎潤一郎集』(二)(日本現代文学全集44 伊藤整ほか編集)講談社

Lefevere, Andre (1992). *Translation, Rewriting and the Manipulation of Literary Fame*. London: Routledge.

- 野口武彦(1984)解説『細雪』下巻 (日本の文学 74) ほるぷ出版  
小田切進(1969)解説『細雪』上巻 旺文社  
小田切進(1974a)解説『細雪』下巻 旺文社  
小田切進(1974b)解説『細雪』中巻 旺文社  
サイデンスティック(1966)解説『谷崎潤一郎』(二)(日本の文学 24) 中央公論社  
孫日明・陳競・梁守堅訳(1991)『乱世四姐妹』 広西民族出版社  
谷崎潤一郎(1959)「『細雪』回顧」『谷崎潤一郎全集』第30巻 中央公論社  
谷崎潤一郎(1966 - 1970)「雪後庵夜話」『谷崎潤一郎全集』第19巻 中央公論社  
谷崎潤一郎(1969)「『細雪』を書いたころ」『谷崎潤一郎全集』第23巻 中央公論社  
谷崎潤一郎(1980)『細雪』『谷崎潤一郎集』(二)(日本現代文学全集 44) 講談社  
谷崎松子(1967)『倚松庵の夢』 中央公論社  
十返肇(1954)解説『谷崎潤一郎集』(昭和文学全集 31 続) 角川書店  
十返肇(1961)解説『谷崎潤一郎』3 (昭和文学全集) 角川書店  
王向遠(2000)『二十世紀中国的日本翻譯文学史』 北京師範大学出版社  
王秀霞(2010)「日本傳統女性的典型形象」『山東文学』 學術版第5期  
文潔若(1990)「唯美主義作家谷崎潤一郎」『日語學習与研究』01期  
文潔若(1997)「記者型的學者井上靖」『文学姻縁』 湖南人民出版社  
楊炳菁(2009)「文学翻譯与翻譯文学—林訳村上文本在中国大陸」『日語學習与研究』  
第5期  
楊 煒(2006)「唯美主義作家谷崎潤一郎代表作『細雪』簡析」『河北北方学院学报』03期  
章克標(2003)『章克標文集』陳福康・蔣山青編 上海社会科学出版社  
章 艷(2005)「文化視角觀照下的訳序跋研究—以『飄』重訳本訳序為例」『國際訳聯第四屆垂  
洲翻譯家論壇論文集』  
周逸之訳(1985)『細雪』 湖南人民出版社